

[研究ノート]

戦前の日本における管弦楽レパートリーの統計（1888年-1941年）

井上 登喜子

1. 本研究の目的

本研究は、明治後期から昭和初期までの東京および複数の地方都市における性格の異なるオーケストラ活動を対象としてレパートリー・データを収集し、それに基づくレパートリー・データベースを構築することによって、日本における管弦楽レパートリーの定量的把握を試みるものである。戦前の日本における洋楽受容に関して、大量データに基づくレパートリー形成の実証研究によって明らかにする試みは従来になく、本研究が初めてのものとなる。これまでの研究経過で筆者はレパートリー・サンプルの一部を発表してきたが（井上2005, 2006a, 2006b）、この小論では、より包括的なレパートリー・データの基本統計を示して、初期の管弦楽レパートリー形成に関する全体傾向を、時代・団体のクロスセクションで捉えることを目的とする。

2. サンプルとデータ

本研究では、明治後期から大正期にかけて設立された洋楽演奏団体（及び音楽学校）のうち、管弦楽曲の受容と普及に影響をもったと考えられる東京音楽学校（音楽取調掛を母体として1887年に設立、東京芸術大学音楽学部の前身）、学生オーケストラ及び学生音楽団体（1902年以降1924年までに設立された9団体）、新交響楽団（日本交響楽協会を母体として1926年に設立、NHK 交響楽団の前身）を考察対象とした。これらの団体は設立の経緯も様々であり、団体の性格や役割という点でも異なっている。東京音楽学校は音楽専門家を目的として設置された官立の音楽学校、学生オーケストラは全国の高等教育機関（帝国大学と私立大学）で設立された学生を中心とするアマチュアの演奏団体、そして新交響楽団は日本放送協会の資金援助を背景に、東京に設立された日本初の常設の職業オーケストラである。これらの11団体を対象に、太平洋戦争前まで（1941年まで）の演奏活動の記録を収集し、レパートリー・データベースを構築した。データ構成は1演奏曲目を1サンプルとした。サンプル数合計は14,712である（表1）。上記のような団体間の相違は、以下で示すように、サンプル構成ならびにレパートリー形成からも見て取れる。

3. データの概要：基本統計

最初に、演奏会数と演奏曲目数に注目する（表2）。東京音楽学校は設立直後から演奏を開始し、1898年以降定期演奏会を行っている。演奏会数は1907年頃から増え、それに伴い演奏曲目数も増加しているが、管弦楽曲の演奏比率は時代が下っても一定の割合（10%～

20%)に留まることから、管弦楽演奏と並んで他のジャンルの演奏が大きな位置を占めていたことが分かる。学生オーケストラについては、1912年頃までは慶応義塾ワグネル・ソサイエティが単独で演奏活動を行なっているためサンプル数が少ないが、その後、他大学のオーケストラの設立とともに演奏会数が増加する。初期の演奏活動では比較的低かった管弦楽曲の演奏比率は時代とともに高まるが、管弦楽比率は60%前後で留まっている。新交響楽団は年間の演奏会数、演奏曲目数、管弦楽比率において学生オーケストラを凌いでおり、設立時より「プロ」の団体としてアマチュアの演奏団体とは一線を画している。

表1 対象団体とサンプル数

団体名	設立年 (年号)	定期演奏 開始年 (年号)	全体サンプル数	公開演奏サンプル数 (全体サンプル中の構成比)
東京音楽学校	1887 (明治20)	1898 (明治31)	8,948	3,796 (42%)
慶應義塾ワグネル・ソサイエティ	1902 (明治35)	1902 (明治35)	1,012	872 (86%)
九州帝国大学フィルハーモニー会	1910 (明治43)	1910 (明治43)	512	508 (99%)
早稲田大学交響楽団	1913 (大正2)	1913 (大正2)	199	168 (84%)
京都帝国大学学友会音楽部オーケストラ	1916 (大正5)	1916 (大正5)	565	510 (90%)
東京帝国大学学友会音楽部オーケストラ	1920 (大正9)	1920 (大正9)	402	352 (88%)
東北帝国大学学友会音楽部オーケストラ	1921 (大正10)	1921 (大正10)	200	200 (100%)
学習院輔仁会音楽部オーケストラ	1922 (大正11)	1922 (大正11)	232	182 (78%)
北海道帝国大学 札幌シンフォニー・オーケストラ	1922 (大正12)	1922 (大正12)	243	205 (84%)
北海道帝国大学文武会音楽部オーケストラ	1924 (大正13)	1924 (大正13)	196	125 (64%)
北海道帝国大学オーケストラ(合併後) ^{注1}	1941 (昭和16)	1941 (昭和16)	13	12 (92%)
学生オーケストラ合計			3,574	3,134 (88%)
新交響楽団	1926 (大正15)	1927 (昭和2)	2,190	2,190 (100%)
合計			14,712	9,120 (62%)

注1 北海道帝国大学オーケストラは、札幌シンフォニー・オーケストラと文武会音楽部オーケストラが合併したものの。

表2 演奏会数と演奏曲目数

年	東京音楽学校				学生オーケストラ				新交響楽団			
	演奏会数		演奏曲目数		演奏会数		演奏曲目数		演奏会数		演奏曲目数	
	全曲目	管弦楽曲 (構成比)	全曲目	管弦楽曲 (構成比)	全曲目	管弦楽曲 (構成比)	全曲目	管弦楽曲 (構成比)	全曲目	管弦楽曲 (構成比)		
1888-1891	14	121	10	8%								
1892-1896	12	292	3	1%								
1897-1901	16	435	42	10%								
1902-1906	23	559	91	16%	8	74	22	30%				
1907-1911	54	726	127	17%	14	166	31	19%				
1912-1916	62	1,035	145	14%	18	175	65	37%				
1917-1921	49	685	154	22%	33	515	238	46%				
1922-1926	57	899	143	16%	48	743	391	53%				
1927-1931	55	737	79	11%	52	595	379	64%	195	775	741	96%
1932-1936	123	1,819	353	19%	64	588	358	61%	186	715	653	91%
1937-1941	142	1,640	184	11%	69	718	325	45%	209	700	679	97%
合計	607	8,948	1,331	15%	306	3,574	1,809	51%	590	2,190	2,073	95%

次に、演奏機会に注目すると、新交響楽団の演奏活動が極めて公開性の高いものであった一方で、東京音楽学校と学生オーケストラは、「定期演奏会」や「学外演奏会（演奏旅行含む）」などの公開性の高いものから「学内演奏会」や「学内行事での演奏」のように公開性の低いものまで、様々な演奏機会を経験していることが分かる（表3）。表1では、公開性の高い「定期演奏会」と「学外演奏会」での演奏曲目を「公開演奏サンプル」として区別している（東京音楽学校42%、学生オーケストラ88%、新交響楽団100%）。東京音楽学校による公開演奏サンプルの割合が低いのは、在校生や教員、同窓生による「学内演奏会」が数多く催されたためである。

表3 演奏機会の内訳

団体名(考察対象期間)	定期演奏会 (曲数)	学外演奏会 (曲数)	学内演奏会 (曲数)	学内行事で の演奏 (曲数)	他大学との 合同演奏 (曲数)	ラジオ放送 (曲数)	欠損値
東京音楽学校(1888-1941)	960	2,811	4,980	0	0	25	172
慶應義塾ワグネル・ソサイエティ(1902-1941)	713	159	55	85	0	0	0
九州帝国大学フィルハーモニー会(1910-1941)	338	170	4	0	0	0	0
早稲田大学交響楽団(1913-1941)	68	100	7	22	2	0	0
京都帝国大学学友会音楽部オーケストラ(1916-1941)	440	70	0	0	34	21	0
東京帝国大学学友会音楽部オーケストラ(1920-1941)	290	62	13	8	26	3	0
東北帝国大学学友会音楽部オーケストラ(1921-1941)	200	0	0	0	0	0	0
学習院輔仁会音楽部オーケストラ(1922-1941)	182	0	41	0	0	4	5
北海道帝国大学 札幌シンフォニー・オーケストラ(1922-1941)	151	54	0	17	0	21	0
北海道帝国大学文武会音楽部オーケストラ(1924-1941)	122	3	0	61	0	10	0
北海道帝国大学オーケストラ(合併後)(1941)	5	7					1
学生オーケストラ合計	2,509	625	120	193	62	59	6

また、東京音楽学校と学生オーケストラの演奏曲目の種類をみると（表4）、管弦楽曲（交響曲、協奏曲、管弦楽小品、室内楽曲、管弦楽伴奏付き独唱や合唱）から管弦楽以外の曲目まで多岐に渡っていることが分かる。全体サンプルで見た場合、東京音楽学校では管弦楽曲（22%）と並んで、独奏曲（30.2%）、独唱曲（21.4%）、合唱曲（20.7%）が高い構成比を占めており、本校の演奏家養成、教員養成という教育方針を反映している。学生オーケストラ（学生団体）では、管弦楽曲が高い構成比を占める早稲田（94.7%）や京大（79.9%）から、慶応のように管弦楽曲（33.7%）よりもそれ以外の曲目（66.3%）の方が高い割合を占める例など、団体ごとに様々である。表4のサンプル構成から、学生オーケストラの演奏会は、管弦楽曲のみでなく独奏曲、独唱曲、合唱曲が間に挟まれる「混合的な」プログラムの様相を呈していたことが見て取れる。

表4 サンプルのジャンル別分類

団体名	管弦楽演奏されるもの						管弦楽以外のもの					小計	合計
	交響曲	協奏曲	管弦楽小品	室内楽等	独唱・合唱 (管弦楽伴 奏付)	小計	独奏	独唱	合唱	その他			
東京音楽学校	169 2.0%	658 7.7%	399 4.6%	337 3.9%	323 3.8%	1886 22.0%	2,593 30.2%	1,833 21.4%	1,774 20.7%	497 5.8%	6,697 78.0%	8,583 100%	
慶応	22 2.6%	10 1.2%	145 17.0%	67 7.8%	44 5.1%	288 33.7%	117 13.7%	133 15.6%	240 28.1%	77 9.0%	567 66.3%	855 100%	
九大	67 13.2%	8 1.6%	143 28.2%	7 1.4%	9 1.8%	234 46.2%	61 12.0%	37 7.3%	112 22.1%	63 12.4%	273 53.8%	507 100%	
早稲田	36 23.8%	13 8.6%	84 55.6%	4 2.6%	6 4.0%	143 94.7%	4 2.6%	4 2.6%	0 0.0%	0 0.0%	8 5.3%	151 100%	
京大	56 11.1%	21 4.2%	256 50.9%	45 8.9%	24 4.8%	402 79.9%	42 8.3%	21 4.2%	28 5.6%	10 2.0%	101 20.1%	503 100%	
東大	36 11.1%	10 3.1%	94 29.1%	7 2.2%	13 4.0%	160 49.5%	4 1.2%	3 0.9%	142 44.0%	14 4.3%	163 50.5%	323 100%	
東北大	23 11.6%	6 3.0%	59 29.6%	13 6.5%	5 2.5%	106 53.3%	21 10.6%	11 5.5%	36 18.1%	25 12.6%	93 46.7%	199 100%	
学習院	14 7.7%	10 5.5%	77 42.3%	15 8.2%	2 1.1%	118 64.8%	41 22.5%	8 4.4%	7 3.8%	8 4.4%	64 35.2%	182 100%	
北大(合計)	54 16.1%	14 4.2%	140 41.7%	33 9.8%	9 2.7%	250 74.4%	29 8.6%	7 2.1%	26 7.7%	24 7.1%	86 25.6%	336 100%	
新交響楽団	565 26.4%	297 13.9%	938 43.9%	12 0.6%	233 10.9%	2045 95.6%	53 2.5%	8 0.4%	4 0.2%	29 1.4%	94 4.4%	2,139 100%	
合計	1,042 7.6%	1,047 7.6%	2,335 16.9%	540 3.9%	668 4.8%	5,632 40.9%	2,965 21.5%	2,065 15.0%	2,369 17.2%	747 5.4%	8,146 59.1%	13,778 100%	

注1) 各団体のサンプルのジャンル別分類について、上段はサンプル数を、下段は各団体の全体サンプル中の構成比を示したものである。
 注2) 全体サンプル合計14,712のうち、934サンプルについてはジャンル不詳のため欠損値とした。なお、欠損値は表中には示していない。

4. 管弦楽レパートリーの全体傾向

以下、管弦楽曲サンプルに注目し、昭和初期までの管弦楽レパートリーの全体傾向を示す。ここでは管弦楽サンプルについて、時代別分類（17世紀から18世紀前半、18世紀後半から19世紀初頭、19世紀、19世紀末〔20世紀初頭まで〕、20世紀初頭から1941年まで）と、国・地域別分類（ドイツ・オーストリア、フランス、イタリア、ロシア、東欧、北欧、スペイン、イギリス、アメリカ、日本）を行い、さらに時代と国・地域をクロスさせることで時代様式による分類を行っている。分類の結果、構成比の高い順に9つの時代様式について、各団体（学生オーケストラは合計で示す）の管弦楽サンプル構成を示した（表5）。

表5 管弦楽レパートリーの時代様式別分類とその時代推移

団体	管弦楽 曲数	古典派	19世紀	19世紀	19世紀	19世紀	19世紀	19世紀	世紀末	20世紀	その他(欠 損値含む)
			ドイツ	フランス	イタリア	ロシア	東欧	北欧	ドイツ	日本	
東京音楽学校	1,034	313 30.3%	242 23.4%	53 5.1%	26 2.5%	30 2.9%	18 1.7%	35 3.4%	38 3.7%	29 2.8%	250 24.2%
学生オーケストラ	1,560	463 29.7%	127 8.1%	164 10.5%	61 3.9%	102 6.5%	33 2.1%	55 3.5%	25 1.6%	65 4.2%	465 29.8%
新交響楽団	2,073	561 27.1%	489 23.6%	185 8.9%	82 4.0%	244 11.8%	154 7.4%	43 2.1%	120 5.8%	144 6.9%	51 2.5%

注1) 東京音楽学校、学生オーケストラについては公開演奏会サンプル中の管弦楽レパートリーを使用。
 注2) 上段は各時代様式別の管弦楽サンプル数、下段は管弦楽曲中の構成比を示した。

まず、全ての団体で古典派が最も高い構成比を示し、東京音楽学校と新交響楽団では19世紀ドイツ（いわゆるロマン派）が古典派に次いで高い割合を示しているが、これは戦前の日本の管弦楽受容においてドイツ・オーストリア音楽が大きな位置を占めていたことを示唆している。一方、学生オーケストラにおける19世紀ドイツ比率が低い（8.1%）ことは、19世紀ドイツの管弦楽作品における編成の拡大や演奏技術の難易度と関係すると思われる。さらに、新交響楽団は19世紀フランス（8.9%）、19世紀ロシア（11.8%）、19世紀東欧（7.4%）とレパートリーに広がりを持つのに対し、東京音楽学校の管弦楽レパートリーはドイツ・オーストリア音楽への偏向が確認される。

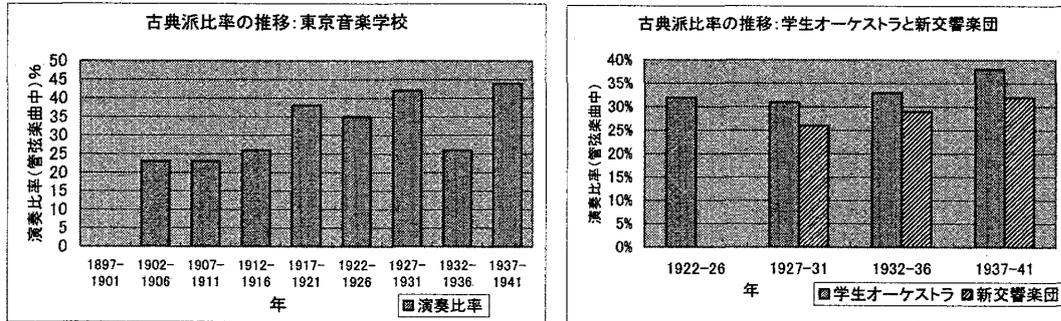
次に、管弦楽レパートリー形成の時代推移による変化を捉えるために、時代様式別の演奏比率の推移を5年単位で示した。ここでは特徴的な傾向をもつ古典派、19世紀ドイツ、19世紀フランスの管弦楽レパートリーを事例として挙げ（グラフ1から3）、各団体間（学生オーケストラについては合計で示す）のレパートリー形成を比較する。

第一に、時間的なずれはあるものの、全ての団体において類似の傾向を示す例が挙げられる。古典派比率の推移（グラフ1）をみると、いずれの団体（グループ）も時代とともに増加傾向を示し、30%から40%という高い構成比に達していることが分かる。この増加傾向は、既に1910年代の東京音楽学校の演奏活動において顕著に見られること、その後に設立された学生オーケストラと新交響楽団によって共有されたことを示している。一方、19世紀フランス比率の推移（グラフ2）をみると、いずれの団体でも時代とともに減少しており、この減少傾向は東京音楽学校において先行して現れている。19世紀ロシア比率についてもこれと同様の傾向が確認された。また、20世紀日本比率については1932年以降の新交響楽団において急速な増加傾向を示し、続く1937年以降には東京音楽学校、学生オーケストラでも後を追うように増加傾向を示したことが確認された。

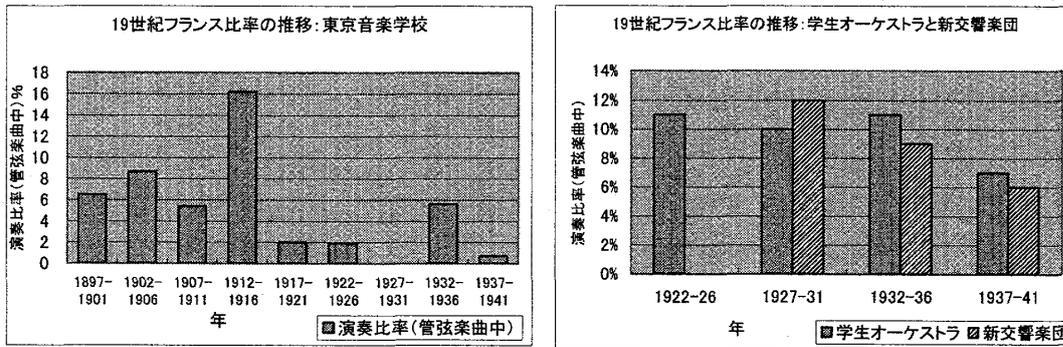
第二に、団体ごとのレパートリー形成にばらつきがある例も見られる。19世紀ドイツ比率（グラフ3）については、新交響楽団で最も構成比が高くかつ若干の増加傾向が見られる一方、学生オーケストラでは増加傾向を示すがその割合は低く、東京音楽学校では時代ごとに演奏比率にばらつきがある。また、19世紀東欧比率でも同様の傾向が確認された。

こうした団体とレパートリー形成の関係の詳細については更なる分析が必要である。

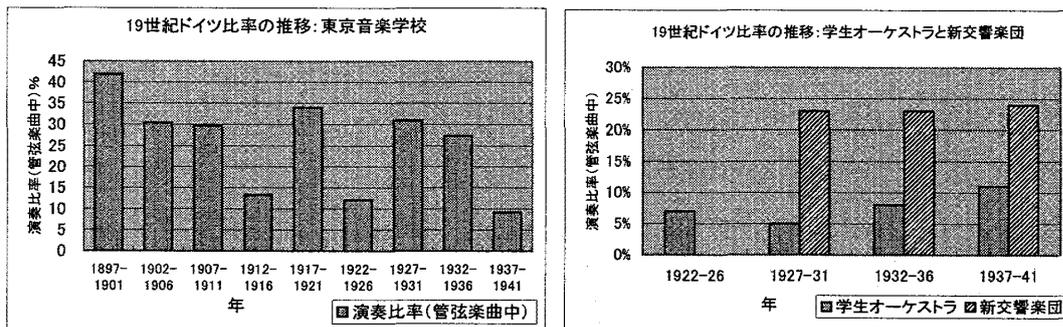
グラフ1 古典派比率（左：東京音楽学校、右：学生オーケストラと新交響楽団）



グラフ2 19世紀フランス比率（左：東京音楽学校、右：学生オーケストラと新交響楽団）



グラフ3 19世紀ドイツ比率（左：東京音楽学校、右：学生オーケストラと新交響楽団）



5. 結びにかえて

本論で示したレパートリー統計は、初期の洋楽受容における管弦楽レパートリー形成の全体傾向を把握するものであり、レパートリー形成を時代と団体のクロスセクションで捉えたものである。こうしたレパートリーの基本統計は、マクロな視点でのレパートリー研究にとって有効であると同時に、個別の団体に焦点をあてたレパートリー分析も可能にするものであり、今後のレパートリー形成の実証研究の基盤になると考える。

参考文献(代表的なものに限り記載)

井上 登喜子

2005 「日本の交響楽団のレパートリー形成の実証分析：明治後期から昭和戦前期までの学生交響楽団を中心に」、お茶の水女子大学『人文科学研究』1: 39-52.

2006a 「20世紀初期の日本における管弦楽レパートリー形成」『お茶の水音楽論集特別号 徳丸吉彦先生古稀記念論文集』241-251.

2006b 「戦前の日本における西洋音楽の人気レパートリーに関する実証研究」『東邦音楽大学・東邦音楽短期大学研究紀要』第16輯(掲載予定).

学習院輔仁会音楽部編

1973 『学習院輔仁会音楽部五十年史』.

九大フィルハーモニー会編

1989 『九大フィルハーモニー・オーケストラ80年史』.

京都大学音楽部交響楽団75年史編集委員会編

1992 『京都大学音楽部交響楽団七十五年史：京大オーケストラと日本の交響楽運動』.

京都帝国大学学友会

1915-24 『學友會誌』 11-14、18-30巻.

慶應義塾ワグネル・ソサイエティー100年史編集委員会編集

2002 『慶應義塾ワグネル・ソサイエティー100年史』.

東京芸術大学百年史編集委員会

1990-2003 『東京芸術大学百年史』 東京：音楽之友社.

東京大学音楽部管弦楽団編

2001 『東京大学音楽部管弦楽団80年史：1920-2000』.

東北大学交響楽団同窓会編

1989 『東北大学交響楽団史：1921-1988』.

NHK 交響楽団編

2000 『フィルハーモニー 99/2000 Special Issue』第72巻第2号.

北海道大学交響楽団編

2003 『北海道交響楽団80周年記念誌・川越守指揮生活50周年記念誌』.

早稲田大学交響楽団編

1970 『早稲田大学交響楽団史：第100回定期演奏会記念』.

付記：本研究は平成16-18年度科学研究費補助金若手研究(B)「近現代日本のオーケストラ活動のレパートリー形成に関する実証研究」(研究課題番号16720022)の研究成果の一部である。

いのうえ ときこ

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了、人文科学博士。

主要論文：「19世紀ドレーズデンの合唱協会の社会史研究」（『音楽学第50巻3号、174-186）、「20世紀初期の日本における管弦楽レパートリー形成」（『お茶の水音楽論集特別号 徳丸吉彦先生古稀記念論文集』、241-251）。

現在、東邦音楽大学、同大学院専任講師。